親を頼ることのできない子どもたちの声を受け止めるために

中学２年生の17人に１人、高校２年生の24人に１人いるというヤングケアラー[*1]。ご自身の10年に渡る介護体験から、ヤングケアラー支援のために必要な制度、私たちにできることについて、町亞聖さんにお話を伺いました。

（インタビュアー：藪本 雅子（やぶもと まさこ）：日本テレビアナウンサー、同報道局記者を経て現在フリーで活動）

藪本　10年ぶりに『十年介護』を改めて読み直して、またしても号泣してしまいました。同じ職場にいたのに、ご家族のケアを１人で背負っていたことに全く気が付かなかった。本当に、魂のこもった本ですね。

町　実は、本という形になってからは１回も読んでないのです。高校３年の時に母が倒れて重度の障害者となり、私の介護生活が始まりました。大学４年の時に、卒論代わりに書いておこうと、原稿用紙１００枚ぐらい書いておいたものがベースになっています。その後、母が癌で闘病したのですが、そのときは、すでに医療や介護の取材もしていて、生涯のテーマにしようと思っていたので詳細に書いていました。ですから、全てが生々しくて、そのまま風景が浮かんでくるので読み返せないのです。

藪本　明るくて、豪快なお母さんでしたね。

町　私自身も母も、まさかですよ。当時母は40歳。１７０センチもあって健康だけが取りえみたい

町　亞聖 さん
1995（平成７）年、日本テレビにアナウンサーとして入社。その後、報道キャスター、記者を経てフリーに。2011（平成23）年、脳障害で車いすの母と過ごした10年の日々と母と父をがんで亡くした経験を綴った著書『十年介護』を上梓。2021（令和３）年には念願だった東京パラリンピックを取材。医療と介護を生涯のテーマに取材、啓発活動を続けている。

な人でした。飛んできた石が歯に当たって、前歯がちょっと金歯なんです。それを隠すこともなく「ハハハ」といつも笑っていて、それがすごく素敵で。介護生活が始まってからも、変わらずにいてくれましたが、やはり、生きづらかった。当時は、バリアフリーなんて言葉も一般的ではなく、介護保険もないから第三者の手は借りられない。食事も今みたいに気軽にテイクアウトできるところは少ないし、父は、横のものを縦にもしないような人でしたので、全部私がやらなければいけなかった。

藪本　ヤングケアラーという言葉がこの数年でようやく定着し、注目されるようになってきました。

町　一番解決しなきゃいけないのは、進学するか就職するかの運命の分かれ道です。弟は人生のタイミングで、結局就職を選ぶしかなかった。誰にも相談せず、自分で決めて私に報告してくれたのですが、姉としては本当にそれで良かったのかという思いが残ります。妹は、当時子どもだったことで私はすごく救われました。母が一年入院して家に戻ってきた時、私はやはり気が重かったのです。弟、妹、それに父の世話と家事。現実問題を背負わなきゃいけないのは複雑で、「良かったね」と無邪気に言える妹がうらやましかった。でも、やっぱり良かった。妹がずっと素直でいてくれたことに感謝しています。自分の将来も分からなかったけれど、逃げ出しちゃダメだと思えたのは2人がいたから。私一人だったら、たぶん父とぶつかって、「お母さん、ごめん」って家を出ちゃったかもしれない。父は、手は上げないのですが、機嫌が悪いときはお茶碗をガラスに向かって投げ付けるような人でした。でも、歳を重ねて思うのは、父も行き場のない思いを抱えていたのだろうと。早くに父親を亡くして母子家庭で育ち、貧しかったため大学への進学は叶わなかった。母が倒れて、さらに自分の運命を受け入れられなかったのではないかと思います。私が自分の言葉で伝えることをすごく大事にしているのは、言語障害のために自分の思いを伝えられなかった母とそんな父を見ていたからでしょうね。父がもう少し言葉を持っていれば違ったのだと思います。「俺の言うことを聞け」といつも言っていましたが、今、通訳すると、「亞聖に頑張ってもらって、この状況から抜け出して道を切り開いてほしい」というメッセージだったと思う。自分でも言うのもなんだけど、私、いい娘だから（笑）。

○支援の制度がない

藪本　ヤングケアラーそれぞれに事情は違うと思いますが、どんな支援が必要なのでしょう。

町　大事なのは、その子が、その環境の中でどうしたいのか。今やってることを代わってほしいと思っている子は、実はそれほど多くないのです。親が困っていたらやっぱり子どもも何かやりたいと思うわけで、その感情も大切にしてあげないと。全部ひっぺがして、「ここは私たちがやるから、あなたは勉強だけやってていいのよ」

＊1）文部科学省「ヤングケアラーに関する調査研究について」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/mext_01458.html

ではいけない。自分の置かれた環境を自分の中で消化しないと、本人の意思を尊重した支援にはなりません。お母さん、お父さんの世話をしたい。だけど、自分の時間を確保するためにはどうしたらいいか、という支援が必要です。

藪本　今、実際にはどんな支援がありますか。

町　まだ制度がなくて、国は2022（令和4）年から3年間かけて家事支援や相談先の確保などを行うモデル事業*2を始めています。具体的には相談を受けて福祉サービスにつなぐコーディネーターを配置し、家事やきょうだいの育児を支援するヘルパーさんを派遣するなどの取組です。でも、例えばうちは母親ではなくて、お酒を飲んで暴れる父親が問題で、ヘルパーさんが簡単に入れるかといえば、「何しに来たんだ、おまえ」みたいに絶対になると思う。だから、ちょっと想定が甘いと思います。実態調査も行われていますが、これはとても重要です。自由記述のあるアンケート調査によって初めて困りごとが可視化されていきます。埼玉の調査結果を見ると、「睡眠が十分に取れない」「自分のことについて話を聞いてほしい」「学習サポートや進路相談に乗ってほしい」、この3つが多い。ただ、どんなサービスがあるのか子どもにはイメージできないと思うので、「こんな支援があります」ということを大人がちゃんと伝える必要があります。

藪本　ヤングケアラーを早期に発見するというのも大事かと思いますが、一番身近なのは学校でしょうか。

町　学校の先生は、その子たちが授業中に居眠りすることや、宿題をしてこない理由がよく分からないままだったりします。家庭訪問も最近はやらないですよね。

藪本　子どもから先生に相談はできないものですか。

町　そうですね。母の介護のことも父が酒を飲んで暴れることも家庭の問題であり、先生に相談しても、どうせ解決できないと思い込んでいました。でも、親以外で一番身近にいる先生に話を聴いてもらいたかったです。結局、弟や私のように誰にも相談できないまま、ヤングケアラーは人生の分かれ道を自分で決断しなきゃいけない。そこを変えたいなと思います。先生が一人で抱え込む必要はなくて、その子を地域のソーシャルワーカーなど、然るべき専門職につないでもらえたらと思います。それから、病院はこれからヤングケアラーになる子と、現在進行形でヤングケアラーの子が来る場所です。倒れたお母さん、お父さんのそばには子どもがいるわけですよ。以前、医療ソーシャルワーカーの方たちと勉強会をして「接したことがない」という人がたくさんいました。そんなはずはない。アンテナが多分立っていなかっただけです。家族の聞き取りをすれば分かることで、その家庭に行ける人を手配すればいい話です。

藪本　そこは、今すぐ改善できそうですね。ところで、介護保険はヤングケアラーの負担軽減のためには使えないのですよね。

＊2）参考：厚生労働省「こどもがこどもでいられる街に。」 https://www.mhlw.go.jp/young-carer/

町　介護保険のサービスは本人にしか提供できません。家族のご飯を作ったり、洗濯したりという支援はできない。ヘルパーさんがただで働くわけにはいかないから、ヤングケアラーを支援した時の報酬が付くような制度を作る必要があると思います。病院にはヤングケアラーを見つけて支援につなげたら、診療報酬が付くようにはなりました。ちゃんと制度になることが、その支援を長く続けていくために重要なことです。

○「ゆめ旅ＫＡＩＧＯ」

藪本　医療、介護、福祉の分野で、幅広く活動されていますが、「ゆめ旅ＫＡＩＧＯ」*3について教えてください。

町　これは、まさに私がやりたかったことです。母が車いすになってからもできるだけ外に連れていっていましたが、どうしても車いすだと気兼ねなく行ける場所は限られています。でも、マンパワーさえあれば諦めることもない。だから、２年前の東京オリンピック・パラリンピックを車いすの人と一緒に観戦しようと、千葉商科大学の学生さんにボランティアで入ってもらい、１万人の参加を目指して活動していました。施設訪問をして、一緒にボッチャを体験してもらったりして盛り上げてきましたが、ご承知のとおりコロナ禍で無観客、パブリックビューイングも中止となり、実現できませんでした。それでも、今もオンラインを活用しながら活動を続けていて、２０２５（令和７）年の大阪万博に車いすの人たちと一緒に出掛けたいと思っています。

藪本　学生さんにとっても、いい経験ですね。

町　学生さんたち、最初は受け身でしたが、自主的に企画を考えるようになり、いつの間にか大人のメンバーを引っ張ってくれるようになりました。銀座の街にどれぐらいバリアがあるのか、車いす体験もしました。介護の仕事に就くわけじゃなく、一般の会社に就職する学生の方が多いのですが、スーパーに就職が決まった男子学生が最後に掛けてくれた言葉がうれしくて。「町さん、スーパーの陳列、低くしますね」って。こういうマインドが育つことが大事ですよね。

○壁の向こうに声を届ける

町　親を頼れない子どもたちの巣立ちを応援するＮＰＯ法人ブリッジフォースマイル*4のイベント「コエール」*5も手伝っています。児童養護施設出身者は、壮絶な経験をしている子が少なくないのですが、それを本人がスピーチすることで社会へ届けるというものです。ほとんどが虐待で、育児ネグレクトだったり、親がアルコール依存だったり、家庭が機能不全を起こしているのはヤングケアラーと同じだと思うのです。千差万別ですけど、貧困の連鎖から子ども自身の力で抜け出すことは難しく、連鎖を断ち切るためにも親への支援も絶対に必要です。支援がちゃんと届けば、将来的にみんなが自立できると思います。そういう子たちの声を多くの大人に知っても

＊３）ゆめ旅ＫＡＩＧＯ・Ｆａｃｅｂｏｏｋ　https://www.facebook.com/oriparakaigo/
＊４）ブリッジフォースマイル　https://www.b4s.jp/
＊５）コエール　https://coyell.b4s.jp/

らいたいと思っています。

藪本　ご自身の経験が、いろいろな活動につながっていますね。

町　「やりたい」って手を挙げたわけじゃなくて、人の縁がつながって全て出会ってる感じです。私の活動の原点は、障害者の生きづらさを解消したいという思いでしたが、障害者本人だけでなく、家族も弱音を吐けないでいます。現在の仕事はラジオと講演会が中心ですが、そこでは特に「実は……」という部分を大事に、当事者に話してもらっています。誰かが語れば、必ず次の人が語りやすくなる。当事者の声なくして制度が作られることがないように、声を届けるための架け橋になりたいのです。今はＳＮＳで語れる場は広がってきていますが、双方向性がないと物事は動いていかないと思います。だから、つぶやくだけでなく、その声を受け止める人が必要です。世の中かなりの割合は無関心の人。壁は、「無関心」なんですよね。だから、それをちょっとでも壊していくためには、その壁の向こうに声を届ける人が必要かなと思う。だから、原点から宿題がどんどん増えてる感じですね。やるべきことがたくさんあって、終わらない。

○おわりに

藪本　10年余り、アイユのインタビューを担当させていただきました。話を伺うたびに、この社会の中で、声を出せずに生きづらさを抱えている人の存在が見えるようになっていきました。そして私自身、長年抱えてきた正体不明の生きづらさの原因が、子どもの頃の性被害によるものだったことに気付くことができました。解決すべき人権課題はあまりにも多く、無力感を覚えることもあります。でも、法務省はじめ、全国の自治体、アイユ読者の皆様が共に尽力してくださっていることがとても励みになりました。本当にありがとうございました。これからも私なりのやり方で、「動けば、動く」を信じて、少しでも壁を壊していこうと思います。次号からは、町亞聖さんにバトンを託します。

町　日本テレビ時代にアナウンサーから報道局の記者になるという同じ経験をされた先輩の藪本さんからバトンを受け取ることができて光栄ですし本当に嬉しいです。18歳の時に直面した母の介護が私の原点ですが、人生に起きたこと全てが無駄ではなく「今」につながっていました。他者を１００％理解することは難しいからこそ、さまざまな生きづらさを抱えている当事者の思いを想像する力が必要です。そんな想像力を育む一助になるように、これからも真摯に語りを紡いでいきたいと思います。

●町亞聖オフィシャルブログ

https://ameblo.jp/machi-asei/

✽後記　《アイユ編集室》藪本さん、2012（平成24）年８月号から10年以上の長きにわたりインタビュアーとしてご協力いただき、ありがとうございました。そして、次号から町さんのインタビュー、よろしくお願いいたします。